

道の途中で道によせにバクヂしてるつうだない、「はてな、こういうどご通って行くにはとってもおっかなくて（恐しくて）通らんに、なじょに（どのように）しっぺ」と思ってたら、年とうった婆さんが、ほら、杖ついて来たんだつうんだ、「あのう、おめはこれがらどこまで行くんだ」って、「おら部落まで下^さがんだ」って、ほんじゃらおれの着物着てげ」って、それからその婆^ばっば着物ぬいでくっちゃがら、着物着てのよせ（わき）を通ったらば、「なんだ、がさがさ音^ずするな」つうわけなんだ、ばくちぶちがよ、んじゃ音するなんちゅうがら、ずっとよせ通ったらよ、「大したがま蛙だ、がま蛙がはってぐだ、その蛙殺すが」なんて言う者も居んだって、「いや、殺さね方がいいべ、あんまり大きいがら殺さんに」つうごどで、ようやくのごどでそこを通りぬけて来て、婆^ばっばの着物着たままで家へ入ったんだ。

「なーんだ、こけ、大した蛙がかけこんだ」ちゅうわけなんだ。

「いや、蛙でねえ、おれだって、娘だ」って、その着物ぬいだらば、はあ、本当の娘になっちゃって、蛙が助けてもらったから、助けたわけ、そこで、話栄えだない。